

## 【研究レポート】

# プロジェクト型教育としてのレッジョ・アプローチ回想ノート

初等教育科 教授 吉村 壮 明

## 1 想起（はじめとして）

レッジョ・エミリア（Reggio Emilia）の教育方法（以下レッジョ・アプローチ）が劇的に日本に受容され、主に教育界で新しい保育や幼児教育の方策として着目され、どれくらいの年月が経過するだろうか。当時、先進的な保育として紹介され、一種の保育・幼児教育界を席卷する流行として流布したように思える。保育所保育指針や幼稚園教育要領がありながらも、一般的に園の方針としての各園のアプローチは実に幅広く様々だ。感覚教育や規律を重視するモンテッソーリメソッドや、芸術教育を中核とした「教育芸術」としてのシュタイナー教育、自由作文に代表されるフレネ教育などの他、後発的資本主義の日本を含むアジア特有の早期教育や原点に立ち続けようとする自然体験に重点を置く保育などが挙げられよう。それらの提供は私見として「大人の善意による多様性」であると前向きに考えているが、それにしても、これ程までに時として相反する価値観が園の方針になるのは、初等教育や中等教育の振幅では考えられないだろう。筆者は図画工作・美術教育学、広義には文化実践論を専門としているが、元来、中学校美術や高等学校美術を生業とした中等教育現場の出身であり、高等教育では約20年間以上、保育士や幼稚園・小学校教員養成に携わっている。

さて、日本だけの状況を考えてみても、今現在、国内でも就学前教育でレッジョ・アプローチを取り入れた保育・幼児教育方針を掲げている保育園や幼稚園、こども園が学校法人や社会福祉法人を中心に見られるようになった。無論、あの伝統あるモンテッソーリにはその数は及ばないのだが、ネットで検索してもいくつかの園がヒットする。筆者が2020年1月に調べたところ全国で保育・幼稚園14園（北海道1、東京9、神奈川1、千葉1、大阪1、広島1）が存在している。無論、ネット上にも出ず、レッジョ・アプローチに影響を受けた保育方針の園も多々あるだろう。ただ、あれ程、熱風のような嵐を巻き起こしたこのムーブメントは日本の保育・幼児教育でもう少し根を張っていてもいいのではないかという印象もなくはない。原因はこの運動が持つ徹底した「こども主体」の「プロジェクト性」故に根付きにくい一因があるではと筆者は考えている。近年、「協同」という言葉は頻繁に見受けられるようにはなったが、「幼児と表現」の関係を考えるにあたって、この小稿では、自身の経験を含めた回想ノートを記してみたいと思う。

## 2 プロジェッタツィオーネの衝撃

周知の通り、ローリス・マラグッツィ（Loris Malaguzzi）はレッジョ・アプローチの創始者として挙げられるが、1991年のニューズウィーク誌に「最も革新的な幼児教育」として紹介され、おそ

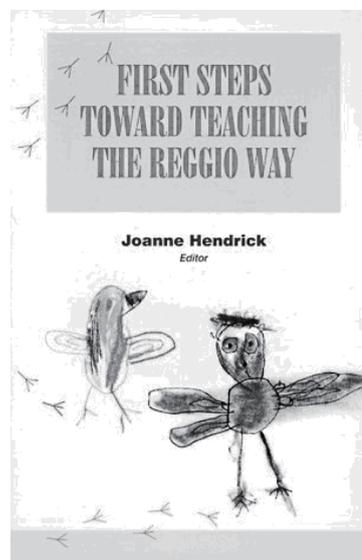


レッジョチルドレン著／訳 田辺敬子, 木下 龍太郎, 辻 昌宏『子どもたちの100の言葉—イタリア/レッジョ・エミリア市の幼児教育実践記録』学習研究社, 2001（著者私物画像）

らく多くの保育や幼児教育、美術教育に携わる人々はこの実践を通して、ある種の驚愕を覚えたに違いない。レッジョ・アプローチの発祥とその詳細史は多くの書籍で書かれているため、このノートで詳しく述べるつもりはないが、第二次大戦後、徹底して破壊されて荒廃したヴィラ・チェラで遺棄された軍需用品を売り、主に女性たちがレンガを積み出して幼児学校をつくろうとしていたという。マラグッツィのこの経験が、レッジョ・エミリア市の公立幼年学校設立に繋がっているという歴史は神話化している。

レッジョ・アプローチの特質は、ごく端的に言えば、すべての子どもたちが達成すべき最低到達基準を定めるような「完全習得学習」(マスタリーラーニング)で有名なブルームの教授方法論の否定を前提にした、(1)子ども主体、(2)アートとアトリエリスタの重要性、(3)ドキュメンテーションによる記録と自己相互評価、という点だろう。佐伯胖氏が「[アートの思考]の教育」で論じていることだが、筆者の図画工作・美術教育学という専門領域からすると、「マラグッツィが導入した方式として特筆すべきことは、すべての幼児学校に「アトリエリスタ」(芸術指導員)という美術系の専門員を配備すること」<sup>(1)</sup>とした点は非常に興味深い。配置によって子どもたちの創造的活動が強烈に進んだためであるが、それも公立の幼児学校であるという点は着目してよい。また、言うまでも無いが、レッジョ・アプローチはプロジェクト型教育とも言われる。これはカリキュラム化されたプログラム型教育とは異質のものだと言って良い。もともとプロジェクトツィオーネ(progettazione)というプロジェクト活動がレッジョ・アプローチの一番の特徴だからである。

子どもたちの関心事や他愛もないおしゃべりがドキュメンテーションとして詳細に記録され、そこから保育職員と芸術指導員が今後の展開となるキーワードを拾い上げ、その言葉を投げかけて、そこから「やること」が事後的に発見され、次第にグループで展開していくというものだ。『レッジョ・エミリア保育実践入門』には「プロジェクトの立案は、子どもたちや保育者たちの経験の連続から生じますが、これは彼らが知識をいっしょに構築していくからです。プロジェクトは、数日～数か月に及びます。」<sup>(2)</sup>とあるが、つまり徹頭徹尾、反教授主義、月並みに言えば反プログラム主義なのである。当然、保育活動ではあらかじめ明確な到達目標や到達基準が定められるわけではなく、期間も結果もわからないままに、レッジョ・アプローチはプロジェクトを進めていくのだ(その背景には、その自律的プロジェクトを支えるドキュメントとしての膨大な記録分析があり、次に予想される活動を検討する多くの専門職員達の支援がある)。この点は多くの保育プロパーを驚かせ、当惑させたことは想像に難くない。つまりレッジョ・アプローチの核が、多くの保育者が、育てて欲しい姿を願いつつも、ある程度の結果や成果が必ず想定された「プログラム」を自明のものとしていたにもかかわらず、レッジョ・アプローチは、個々の経験的認識と協同の連鎖である結果の見えない「プロジェクト」であったからである。



Joanne Hendrick, *First Steps Toward Teaching the Reggio Way*, Prentice Hall, 1996



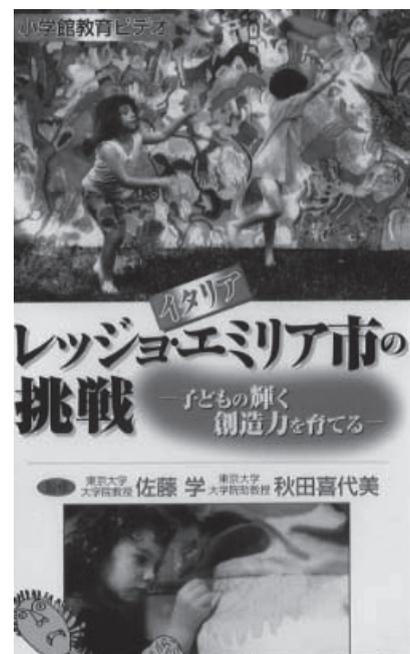
ジョアンナ・ヘンドリック/石垣恵美子訳、玉置哲淳訳『レッジョ・エミリア保育実践入門: 保育者はいま、何を求められているか』北大路書房, 2000 (著者私物画像)

### 3 追想としてのレッジョ・エミリアと南島

この熱病のように北イタリア発祥のレッジョ・エミリアの保育が話題になった当時、筆者は沖縄キリスト教短期大学に勤務していたが、長年の友人である琉球大学の教員と、カタログや邦訳前の冊子を机上に「そもそもレッジョ（アプローチ）とはなんだろうか」とお互いの研究室でお茶を飲みながら話し込んだことが思い起こされる。もうかれこれ20年も前になるだろうか。『子どもたちの100の言葉—イタリア/レッジョ・エミリア市の幼児教育実践記録』（<sup>3</sup>）は筆者が初めてレッジョ関連の書籍で購入したもののだが、この書籍に掲載された写真には、実に多様な材料を使用し、鮮やかな色彩で描かれた美術作品や熱心に工作をしている子どもたちの姿があった。率直に言えば、画像だけを眺めれば、幼児が美術作品を作り出すことに特化した就学前教育の特殊な「プログラム」にしか見えなくもなかったのだ。そう。誰しもが当初、レッジョをそう思ったのではないだろうか。今となっては、多くの研究論文や邦訳された文献、理論書も流布し、イタリアという歴史的コンテクストで納得したかのような「幼児美術学校」と錯誤する人々もいないだろう。そういえば、私をアトリエリスタ（atelierista）として、教育学を専門とする研究者から一緒に何か共同研究をやりませんかという誘いがあったのもこの時期だ。教育学プロパーの観点からも多大な関心が持たれたことの証左であったと言えよう。またiCloudもYouTubeもないご時世、VHSビデオ『レッジョ・エミリア市の挑戦—子どもの輝く想像力を育てる』小学館、2001（<sup>4</sup>）をAmazonではなく、出版会社の通信販売で購入し、カトリック系幼稚園の先生方と意見交換会をしたこともあった。それぞれの立場で何ができるだろうかと。

その時代的な盛り上がりは、当時の勤務校の学科会議でレッジョ・アプローチに関するイベントをやろうという話が持ち上がり、そのまま研究者を講師として招聘し、現場教員に対する講話とレッジョ・アプローチ体験を企画することとなったのだ（ハワイ大学教育学部客員教授 石垣恵美子「今、なぜレッジョ・エミリアなのか：保育の展望と課題」沖縄キリスト短期大学、2003.5.3）。本邦初と言われるワタリウムでの展覧会開催から僅か2年後に日本のエッジに位置する南の島の大学において、学科会議での雑談から一気に企画が進んだのは、やはり、このアプローチが注目されていたことが背景にある。

レッジョ・アプローチに関する解説書であるヘンドリック（Joanne Hendrick）の*First Steps Toward Teaching the Reggio Way*（<sup>5</sup>）を早い時期に優れた訳書として紹介された石垣恵美子氏の分かりやすい講話は印象的だった。この講演後半では演習が企画されており、5人組でガラス製のライトテーブル上に過光性の日常物（薄い植物や色ガラス、ガーゼなど）や特徴的な形態を持つ日常物を配置して、楽しむという活動だったのだが、前日になって受講希望者の増加から、演習で使用する小型蛍光灯が不足し、同僚の社会福祉専門の先生と大急ぎでホームセンターに購入しに行く盛況ぶりだった。前勤務校は、月曜日から木曜日の出校日4日間に授業と会議を行い、金曜日が研究日、土曜日と日曜日が休日という勤務形態だったが、そういった教育研究の環境が学科会議での雑談やディスカッションを通して企画を立ち上げるという迂遠な合意形成のプロセスに加え、このような短期間での企画実現を可能にしたとも言えるだろう。当日は200人を超える大勢の保育や教育関係者が参加され、5月の亜熱帯特有の蒸し暑さに加え、人々の熱気が会場である大学体育館を包み込んで、改めてこのレッジョ・アプローチに対する関心の高さを実感した事をよく憶えている。



佐藤学、秋田喜代美 監修『レッジョ・エミリア市の挑戦—子どもの輝く想像力を育てる』小学館、2001（著者私物画像）

ただ、その企画自体は盛況だったものの、幾つかレッジョ・アプローチ受容の際の素朴な問いや疑問にもぶつかった。現場の先生方から「他にレッジョ・エミリアの教材にはどんなものがありますか」という質問に、何か拭いきれない違和感を感じたのだ。つまりガラスのライトテーブルが「教材」として認識されたという懸念である。また「素晴らしいけれど、日本の保育園や幼稚園でできるのでしょうか」という声も耳にした。ここで回想として筆者が思うのは、「幼児美術学校」という認識は論外としても、レッジョ・アプローチの核の一つとも言うべきドキュメンテーションや、すべての保育・教育的営みを「子どもの主体性」から考えるというこの手法は、現場に根付くのか、そして現在、根付いているのかということである。それはプロジェクト型教育が成立するのかという問いに他ならない。「幼児と表現」という枠組みからであれば、レッジョ・エミリア幼年学校の魅力的な取り組みは、「完全習得学習」(マスタリーラーニング)や、日本の保育・教育制度の硬直化したフレーム(カリキュラムやプログラムといった言葉に象徴されるスタティックな教育課程)に回収されはしないかと、若干、不安になってしまったのである。約17年も前の講演企画運営での追想である。

#### 4 ノートのおわりに

ただ、今となっては、2003年に私が感じた不安の一部は杞憂かもしれない。2020年の現在、明らかにレッジョ・アプローチは一つの幼児教育として受け入れられ、保育・幼児教育の理論としては勿論、確かに難しいと感じるプロジェクト型の保育も私立園を中心に現場にも種子が蒔かれつつあるように感じる。あの爆発的な流行を終え、沈静化し、その理論書が邦訳され、実践に関する資料が数多くの研究者によって考察されるようになり、各地で定期的に研修も催されるようになったのは喜ばしいことである。

例えば、ビデオ映像にもある「鳥を呼び込むプロジェクト」は有名であり、この発案も子どもの発話のドキュメンテーションによって、保育士やアトリエリスタらが企画化し、場合によっては数年も継続されるという点が特徴だが、これが単なる教育プログラムとしての行事やイベントではなく、プロセス「それ自体」が教育目的であるということは今更ながらでも認識する意味はあろう。昨今の加速していく物証や証拠、根拠主義があるが、それは、あくまで結果であって、そのプロセスや着想、創造がどうであったかに光をあてる視点は重要だからだ。いわば、あらかじめ決められた「コース式の料理」(設定保育)でもなければ、「ビュッフェ式の料理」(コーナー保育)でもない。我は「何を欲するか」を、まずは子どもたち自らが創造力によって決めていくのである。我々は「子どもたちに育てたい姿」の方向性が掲げられる今日、すでに「子どもたちは100の言葉を持っている」<sup>6)</sup>と頻りに引用されるフレーズをもっと根本から再考すべきなのだろう。そういった意味で、おそらくレッジョ・アプローチの意義とは、従来の子どもの観や保育に改善を促す「思想」なのだ。レッジョ・アプローチは単なる手法や方法ではなく、子どもを中心とした文化実践の営みであることを忘却してはならない。それは、まさに「未完のプロジェクト」であるとも言える。

2001年から2015年の14年間、住み慣れた亜熱帯の島を後にして、2015年春から筆者はこの東九州の土地に転居したが、日々、保育士養成や幼稚園・小学校教員養成に携わる中で、今回、「幼児」と「表現」という観点から、今年初めて雪の舞う別府の地で回想されたのが、このレッジョ・アプローチとの出会いと、あの14年間の熱き亜熱帯の日々だったというのは、おそらく事後的に何か意味を持ってくるのだろう。メタフォリカルなマラグッツィの詩に象徴される思想やプロジェクトツィオーネの可能性に関する考察は今後の研究論文で進めていきたいと思いつつ、この研究ノートとしての小稿を閉じたいと思う。

## 註

- (1) 佐伯胖 「「アートの思考」の教育」『幼児教育へのいざない』東京大学出版会, 2013, p.195
- (2) ジョアンナ・ヘンドリック／石垣恵美子訳, 玉置哲淳訳 『レッジョ・エミリア保育実践入門: 保育者はいま、何を求められているか』北大路書房, 2000
- (3) レッジョ・チルドレン／訳 田辺敬子, 木下 龍太郎, 辻 昌宏 『子どもたちの100の言葉—イタリア / レッジョ・エミリア市の幼児教育実践記録』学習研究社, 2001
- (4) 佐藤学, 秋田喜代美 監修 『レッジョ・エミリア市の挑戦—子どもの輝く想像力を育てる』小学館, 2001
- (5) Joanne Hendrick, *First Steps Toward Teaching the Reggio Way*. Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall, 1996
- (6) マラグッツィはレッジョ・アプローチの思想をあえて理論ではなく詩で表現しており、この隠喩的形式の選択が、本動向を象徴しているとも言えるだろう。詩は「子どもには百とおりある。子どもには百のことば 百の手 百の考え 百の考え方」と綴られ、後半では「けれど九十九は奪われる 学校や文化が 頭とからだを ばらばらにする」「そして子どもに言う 手を使わずに考えなさい 頭を使わずにやりなさい 話さずに聞きなさい ふざけずに理解しなさい 愛したり驚いたり は 復活祭とクリスマスだけ そして子どもに言う 目の前にある世界を発見しなさい そして百のうち 九十九を奪ってしまう」と続き「そして子どもに言う 遊びと仕事 現実と空想 科学と想像 空と大地 道理と夢は 一緒にはならないものだ」と「つまり百なんかないと言う」しかし、「子どもはいう でも 百はある」と締めくくられる。我々に投げかけられる、このメタファーに満ちた文章はあまりにも有名である。